

「おかえり」ゝある家族のものがたりゝ

所属ゼミ…小説ゼミ2
学籍番号…五二三五三〇一四
氏名…中村 明美

プロローグ

令和三十二年（2050年）に一人暮らしの高齢者が急増するというデータがある。現在の世の中も身内や地域のつながりが薄れている状態だ。

その例として、身元不明の無縁遺骨が令和三年十月末の時点で約六万柱を822市町村で保管しているという実態である。しかも、無縁遺骨のほとんどは氏名が書かれているという。

これらの無縁遺骨は、その存在を親族に知らせても連絡が返ってこないものである。

（産経新聞 令和六年四月十四日の記事より）

今は、親子の血のつながりがあっても様々なわだかまりの中で縁を切ったから面倒を見ないという現実がある。

それが、この無縁遺骨問題につながっているのではないかと思った。

『家族』のあり方も進化しているのだろうか？

いやになったから別れを考える人・気に入らないから家族に手をあげてしまう人等、悲しい現実を目にしたり、聞いたりする時、『家族』の存在って何だろうという思いになる。

そして、『家族』の存在を崩壊してしまう最悪の状態である戦争が世界のある場所でおこっている現状もあるのだ。

以上のことから、戦前・戦後を生きたある家族の物語をとおして、『家族』とは何かを考えていただければと思っている。

①

母の面会から3日後、私と妹、そして妹の子供と一緒に母が家に帰ってくるための買い物をしていった。

妹の車に乗って次の場所に移動しようとしていた時、病院から妹の携帯電話に連絡が入る。

「お母さまの容態がよくありません。危篤状態です。急いで病院にお越しください。」

母の担当である看護師さんからであった。

「えっ。そんな・・・」私は頭の中が一瞬、真っ白になった。

『そんなはずはない。お母さんは大丈夫だ。』と私は、この時でさえ母の状態を受け入れられなかった。

「お姉ちゃん大丈夫？病院に行くよ。」と妹の言葉が現実へ引き戻したのである。

妹たちがいなかったら、私一人でうろたえていただろう。

私たちは、急いで妹が運転する車で病院へむかったのだ。

私は、こんなことになるなんて。3か月前には思ってもみなかった。

母はそれまで一人で暮らし、新しい友達ができ、人生を楽しんでいたのに……………。

②

私の母は、長崎市内で第二次世界大戦が始まる前に生まれた。

幼少期は母の両親、姉2人、兄と長屋で平穩に暮らしていた。母の父親は、幼少期より奉公に出され、その後の努力が実って自分で店を持ち家族を養っていたのである。

しかし、第二次世界大戦が始まると当時の日本国民が皆そうであったように、私の母たちも日本が勝つまで我慢を強いられた。ただし、戦況は思わしくなくなっていく。そして、昭和二十年の八月九日その時を迎えた。

母は当時、小学校の低学年だった。夏休みのため、家で過ごしていたのである。

隣近所のおばさんたちが昼ごはんの用意をし始めていた。

午前十一時二分、浦上方面の空から一瞬、強烈な光が放たれた。子供だった母はその強烈な光を見て怖くなった。

「お母さん！ お母さん！ どこ。」大きな声で叫んだが、ちょうど他の家族は誰もいなかった。

隣近所のおばさんが「はよ、こっちに来んね！」と幼かった母の手を引いて近くの防空壕へ一緒に避難してくれたのである。

防空壕の中は近所の人でいっぱいだった。母は、防空壕の中で恐ろしさのあまり泣き出してしまったらしい。

この日の出来事はあとからわかったことであるが、広島に続き長崎にも原子爆弾が落とされた瞬間だった。浦上川沿いの河口から約二・五キロメートルさかのぼった上空五〇〇メートルの時点でB29が原子爆弾を投下、そして炸裂したのである。

強烈な光を放った後、巨大なきのこ雲が吹き上げる。それと同時に長崎のまちは一瞬のうちにゴーストタウンと化してしまった。

昭和二十年当時、長崎市には二十四万人余りの人々が戦争の中でも必死に生きていた。

それが、一発の原子爆弾によって7万人余りの人の命を奪った。そして、7万人余りの人々が負傷した。

特に、爆心地である浦上あたりは甚大な被害を負った。

大正期に建てられ、レンガ造りの双塔で高さが二十六メートルあり東洋一の壮大さを誇っていた浦上天主堂。

それが、原子爆弾によって鐘楼ドームは吹き飛ばされ、わずかな堂壁を残し崩れ落ちた。

他にも爆心地から近い城山国民学校では、三階建ての鉄筋コンクリートの建物が原子爆弾の爆風によって破壊された。

当時、校内にいた教職員・そして同じく校内に疎開していた三菱兵器製作所で働く動員学徒計百五十人余りのうち百三十人余りの人々が亡くなった。

また、児童は校内に登校していなかったが、爆心地に近い学校だったこともあり約千五百人の児童のうち約千四百人亡くなったと言われている。

爆心地近くを走っていた路面電車は、原子爆弾によって吹き飛ばされ多くの乗員・乗客が亡くなった。そして、長崎刑務所の浦上刑務支所では、原子爆弾によって炊事場の煙突だけを残して全壊、全焼、周囲を取り囲んでいた二十五センチの厚さの塀も一部を残して倒壊、その場にいた職員や受刑者、刑事被告人百三十四人すべて亡くなったという。一般の家庭でも、一家全滅したところや、高齢者や子供だけが生き残ったところもあった。

生き残った人の中には、かなりのやけどを負った人や、原子爆弾投下当時は無傷であつても白血病などで亡くなる人がいたのである。

母が一人で留守番をしていたところは爆心地より四キロメートルの地点であつた。そして、両親、姉2人、兄はかろうじてみんな無事だつた。

そのあと母自身も幼かつたため、原子爆弾投下直後は被害がひどい地域に行かなかつたが、母の父親は原子爆弾の被害にあつた人々を目の当たりにしていた。地獄図と化した町中を歩いて何とか家にたどり着いたらしい。

また、母の姉は爆心地から2キロという近いところで仕事をしていたようだ。

母は、当時の惨劇のことはこれ以上話さなかつた。心のどこかで思い出たくないということが強かつたのであろう。

③

長崎に原子爆弾が落とされてから、程なく八月十五日の終戦を迎えた。

原子爆弾投下直後に負傷をしていなくても、特に爆心地から近いところで被爆した人の中には、放射線の影響で多くの人が亡くなつた。

被爆直後から下痢、嘔吐、発熱、皮下出血、口内炎などの急性期の障害が現れ衰弱する人・脱毛に悩む人・急性期障害が落ち着いた後に若い人も発症した原子爆弾による白内障、そして白血病や癌の障害で苦しむ人々が増えてきた。また、妊娠初期に被爆した女性から生まれた赤ちゃんの中には、小頭症の症状が出ている子もいた。

長崎が悲劇に見舞われている中、この頃の母は原子爆弾の後遺症がまだ出ていなかった。心の中では『これで防空壕に逃げなくてもよかね。』と喜んだそうだ。

終戦後も家族とともに原子爆弾の被害が残る長崎で子供時代を過ごしたのである。

勉強が好きだつた母は、当時中学校卒業して就職する人たちが多い中で女子高校に進学する。

部活動のバレーボールを楽しみ、勉強もして青春を謳歌していた。ただ、母は両親から「友人と喫茶店に行くなどは不良がすることだ。」ときつく禁じられていたようだ。

今だったら当たり前になっていたことであるが……。

女子高校を卒業後は、地元の大手企業に就職する。

この時、同じ会社にした父と出会つた。

父は、九州の他県から長崎の会社に就職し働いていた。当時としては背が高く、ハンサムな方だつた。他の女性からももてていたようである。

最初は、そんな父に対して苦手意識をもっていた母だつた。

長崎出身の母にとって父の話の方が方言まじりで話しているためきつく思えたらしいが、少しずつ打ち解け交際へと発展した。

交際期間中に、こんなエピソードがある。

ある日、父から「霧氷のきれいなところがあるけど見に行かんか？」と誘われた。ちようど正月の時期で着物を着ていたので『こんな格好して行くんね？』と心の中で思ったが、父の勢いに押されて行くことになったらしい。

寒い中、山道を着物姿で歩くのは動きづらくとても大変だった。母はくじけそうになったが、霧氷で一面覆われた場所に着くと、今まで見たことがない美しい景色が広がっていたのでそんな思いは吹き飛んでしまった。

母は、このエピソードを思い出すたびに「とてもきれいだったよ。」と私たちによく話してくれた。

父と交際期間中、母には前々からやってみたいことがあった。

洋裁の技術を習って服を作ってみたいということである。

地元の大手企業に勤めていたが、どうしてもあきらめきれなかったので、両親に「洋裁の学校に行かしてくれんね。」と頼み込んだそうだ。

「最後まで続けんね。それが条件やけんね。」としぶしぶであったが何とか了解をもらう。それで、仕事をやめて洋裁の学校に行くことができた。

母はもともと手先が器用だったので、学校の授業はとても楽しかったらしい。

卒業後には、街中のオーダーメイドの洋服店に就職した。洋裁の技術を見込まれて就職できたと自慢していた。

その店では、仕立ての仕事を担当し、毎日が楽しかったと母はよく言っていた。

父と母の交際はそんな状況の中でも続いていた。

母は、自分の仕事が楽しかったのだらう。結婚よりも仕事を優先していたようだ。

しかし、周囲から「結婚は？」と言われるようになってきた。ただ、母が長崎の被爆者であることを父方の親族は懸念する人もいたそうだ。

父はそんな親族に面とむかって「そんなこと関係なかよ。今はどうもないし、わしが好きやからよかやろう。」と突っぱねた。

いろいろなしがらみもあったが、母は当時の女性の適齢期をやや過ぎた頃に父と結婚することとなる。

父との結婚が決まった頃、母は、両親に負担をかけたくないという思いもあり、自ら式で着用するウェディングドレスをつくろうと考えた。

当時はウェディングドレスを着る女性が少なかった時代である。

しかし、母は結婚式に手製のウェディングドレスをつくると思った同時に早速、ドレスの生地を買ってきて仕事の後に少しずつミシンをかけて縫っていった。

そして式当日、母自ら作ったウェディングドレスを着て、身内だけのこぢんまりとした結婚式をあげることができた。

④

結婚式が終わり、ふたりの新婚生活は長崎の地から始まった。当時、お金に余裕がなかったので新婚旅行はお預けとなったが・・・・・・。

母は家計を支えるため、結婚後も洋裁の仕事を続けていた。

共稼ぎであったが、現代と違って『男子厨房に入らず』で育った父は一切家事をしない。やむをえず、家事のすべてを母がしていたのである。

そんなふたりの新居は、父の姉が所有していた一軒家だ。そこを借りて生活をしていた。庭には、小さないちじくの木があった。毎年、その小さないちじくの木は、たくさんの果実をつけてくれたのである。

しかし母は、いちじくの果実が好きでない。かといって、父一人では食べきれない。

それで、職場の人やご近所の人に配っていたようだ。

父は、小さないちじくの木がある庭の手入れでさえ面倒がって何もしない。だから母が一人でしていたのである。

こうして、長崎での新婚生活は過ぎていった。

ある日、父が「商売がしたい。」という思いを母に打ち明ける。

結婚前から、いずれ自分で会社を立ち上げて頑張りたいという夢があった。

そんな父の強固な思いのため、母はしぶしぶ従うしかなかった。

現在いる長崎では、そのような活躍できる場が少ないだろうと思った父は、母に「大阪へ行こう。」と思いを告げた。東京へ行くことも考えたが、長崎から近い大都市である大阪で頑張ってみたいと考えたのである。

その際、母の母親は、大阪へ行くことに賛成しなかった。末の娘である母が可愛かったのであろう。最後まで長崎に残ってほしいと言っていたらしい。

しかし結局、父は、きょうだいを頼って大阪へ行こうと決めた。

母は、父に従い一緒にいくことになったのである。

そして、大阪へ。父が、一足先に新居へ行くこととなった。

先に出発したものの、電車の降車地を間違えて、新居がある町名と同じ名前がある三重県まで行ってしまったのである。

その間に、引っ越しの荷物が届いてしまい、搬入の手違いで和ダンスに大きな傷がついてしまう。その和ダンスは母の大切な花嫁道具だった。

和ダンスに大きな傷がついたことを知った母は、「なんでちゃんと事前に調べとかんね。」と父に対してかなり怒りをぶつけた。

母は、普段はおとなしいが、言う時はこのようにきっぱりと言うタイプである。

傷ついた和ダンスはというと、母の大切な花嫁道具だったので簡単に捨てることができなかった。

どうしたらよいかと考えた母は、和ダンスの傷の部分に鏡をかけて隠すことにした。

それから、傷が隠れた和ダンスを長く使うことになったのである。

話は父の商売に戻る。

大阪に来たものの、資金がないためにいきなり商売ができなかった。家族を養わなければならないので、やむをえず父は転職先を見つけてそこで働いた。

父と母が大阪にきて程なく、母の大阪行きを心配していた母の母親は体調が悪くなり寝込んでしまった。そのため、母の父親と同じ長崎市内に住んでいた姉たちが交代で看病にあたった。

母は、そんな自分の母親の状況を姉たちから聞いてとても心配だった。だから、毎日、長崎から遠く離れた大阪より電話で姉たちと連絡を取り合っていた。

本当は早く長崎へ帰りたいという思いがあつたが、お金に余裕がないのでなかなか帰れなかったのである。

そのような思いが続いていたある日、母の姉から電話があつた。

看病のかいもなく母の母親は永遠の眠りについたという。

そのことを聞いた母は、親の死に目にあうことができない悔しさでその場に泣き崩れた。

母は、泣きはらした顔で父に「お母さんが亡くなった。葬式には出たいから長崎へ一緒に行ってくれんね。」と懇願した。

父は、母の希望を叶えるために急いでお金を工面した。そのお金で何とか母の故郷、長崎へ帰ることができ、葬儀に間に合った。

後でわかったことであるが、母の母親は、原子爆弾で被爆した後遺症により最期を迎えたのである。

⑤

父と母が、大阪に来てから5年後に私、その2年後に妹が誕生した。

最初に生まれた私は、体重が他の赤ちゃんよりも重い子だった。そして、髪の毛がなかなか生えてこないで「男の子みたい。」とよく言われていた。

母は、最初の子供である赤ん坊の私の髪の毛のことをかなり心配したらしい。

それで私のことを男の子と間違えられるのはかわいそうと思い、外に行く時は必ず帽子をかぶせて大きな乳母車に乗せて出かけていた。

妹が生まれた頃は、私もすっかり女の子らしくなっていたが・・・・・・。

一方、私と違って生まれた時からふさふさしていた妹の髪の毛は、母が赤ん坊の時から散髪していたのである。

それまで家事を一切してこなかった父はというと、最初の子である私が生まれると打って変わってミルクをあげたり、おむつをかえたりしていた。

妹の時も同じように手伝っている。

余程、子供ができたことが父にとってはうれしかったのであろう。

そして、当時団地住まいにも関わらず、大きな七段飾りのひな人形を買ってくれたのであ

る。

2月の後半から3月にかけては、狭い部屋のひとつをひな人形で占領されていたが、私たち子供にとってその時期はともわくわくして楽しいひとときであった。

こんな風に日常生活を送っていた一方、父が希望していた商売は資金がなかったため、借金してまで自分の夢を優先にすることができなかったであろう。

父は、会社組織の中で働き、私たちを養ってくれた。

私が生まれる前に、祖母は原子爆弾の後遺症ですでにこの世を去っている。

そのため、私たち姉妹が生まれる時は、母の一番上の姉である私たちの伯母が手伝いに長崎から来てくれた。

伯母は、何かと妹である母のことを気遣ってくれた。大阪へ移り住んだ母にとっても、伯母は心の支えとなっていたのである。

伯母が、このように母のために大阪へ来てくれたが、私たち家族の方はお金に余裕がないので、お正月休みに父や母の故郷へ家族そろっていくことができない。

だから、お正月は家族そろって家で過ごすことが多かった。

私たち家族のお正月の過ごし方はこんな風である。

まず、家族みんなで近くの寺院へ初詣に行く。そして、新しい一年が良い年でありますようにと願いをこめて初日の出を見に行った。

初詣から家に帰ると、母が用意してくれたおせち料理を家族で食べるのが恒例だ。

日頃食べない大きな海老が入っているので、妹と取り合いになったものである。

そして食事が終わると、父は毎年必ずといっていいほどお正月の記念に家族で写真を撮ってくれた。

話はかわるが、父は若い頃ギャンブルや競馬など賭け事が好きであった。

しかし、私たち姉妹が生まれた後、賭け事に興じてばかりでは家計が火の車になる。

母は、それを心配して父に「子供が生まれたので賭け事はやめんね。」ときつく言ったらしい。

父は、そのことに関しては一家の大黒柱という意識が強かったから、母の言葉に素直に従ったのである。

ただし、昭和世代の男性のたしなみとも言える『たばこ、酒』は毎日続けていた。

そんなある日、母の肺に影が見つかった。

お医者さんから、「ご主人たばこを吸っている？　もしかしたらそれが原因かもしれないね。」と言われる。

そのことを聞いた父は、母がこれ以上悪くなったらどうしようと思ったらしい。

これをきっかけに、今までやめることができなかった『たばこ』をすっぱりやめてしまった。

日頃「俺は九州男児。仕事して家族を食わせてやっている。」と言っていた父。本当は、母のことを好きでしやうがないのに表現の仕方が下手だったたのであろう。その裏返しに、『たばこ』をやめることにつながったのである。

ただ、『たばこ』をやめた父は、その代償で口寂しさを紛らわせるために、おやつ、毎日の晩酌と美味しいおつまみをいっぱい食べてしまう。その結果、みるみるうちに体重が二十キロ以上増えてしまい、昔のスリムな体形はどこかに行ってしまった。

⑥ 私たち姉妹も、両親の影響を受けたのか、幼い頃から他の子どもよりもよく食べる方であつた。『子供にはしつかりと食べさせよう。』という父と母の思いが強かつたのであろう。父が毎日の晩酌やおつまみを楽しんでいたように、私たち姉妹と母は、一日3食の食事以外におやつを楽しんで食べていた。そのせいか、特に私たち姉妹はかなりふっくらとした体形になつた。若い頃スリムだつた母もふっくらとした体形となつてしまつたのである。しかし、私と妹は年頃になると、ふっくらとした体形が気になるようになってきた。他の女の子と同じようにスリムな体形を夢見て甘いものを控えたり、朝から走ったりと頑張つてみたもののなかなか理想の体形からは程遠かつた。

子供の教育について母の考えは『きちんと学校に行かせたい、それも上の学校に行かせたい。』という思いが強かつた。しかし、男尊女卑の環境で育つた父は、『女の子に大学へ行かせる必要はない、すぐに結婚するから。』という考えだつたようだ。母は、そんな考えの父を説得し、少しずつやりくりをして貯金をしてくれていた。そのおかげで、私たち姉妹は短期大学へ進学することはできたのである。実力がなかつたこと、家計に余裕がなかつたことで、二人とも四年制の大学には行けなかつたが・・・・・・。けれども、私たち姉妹は何らかの資格をとりたいという思いもあり、短期大学に進学できたのはとてもありがたかつた。

⑦ 大阪に来てから思うように商売ができなかつた父は、勤務先の会社も倒産や職場の環境が合わないなどということよく転職していた。年齢を重ねるにつれて体調を崩して仕事をやめることもあつた。父が仕事をやめて家にいる期間、私たち姉妹はとても憂うつだつた。いつも、学校から帰るとすぐに父のお説教じみた話を聞かされたからである。また、父が仕事していないということは家にお金が入つてこない。だから『節約、節約』

という言葉が子供心に植え付けられたのである。

父は仕事が合わなくて転職する一方で、母は家計のことはもちろん、私たち姉妹に必要な学校の費用などの足しになればと思いパートの仕事に出ていた。

そんな母の思いとは裏腹に、父は母がパートに出る事をあまりよく思っていなかったようだ。パートで稼いだお金はたいした金額でないから、家のことをしっかりやれという考えだったからだ。

母は、父がそのような考えでよく小言もいわれていたにもかかわらず、パートの仕事を続けていたのである。

両親のそんな姿を見て育ったから、私は女性も仕事してお金を稼がないといけないという気持ちが強くなったのかもしれない。

が、本当は専業で母さんになって主婦することどこかで懂れている自分がいた。

話は私たち姉妹が幼かった頃に戻る。

母はその頃、文房具を製造するところでパートの仕事をしていた。その会社は、時々店に出せない商品をパートの方に無料で譲ってくれることもあった。

その中で、当時は最新だった筆箱を、一部商品として出せないものだからと会社から譲ってもらったことがある。その筆箱を母が私と妹に渡してくれた。5か所入れるところがあり、店で買うとかなり高価なものだった。少し筆箱の扉の開閉がしづらかったが、普段ではなかなか買ってもらえないものだから、それでもうれしかったのである。

その後、母は人員整理のため文房具を製造するパート先をやめることになった。新しく移ったパート先の会社は、機械の部品製造をする職場である。その職場で母は定年まで勤めあげた。

私たち姉妹が子供の頃、母は父の給料が少ないためこんなふうにパートタイムで働きに出て家計を支えていたのだ。

新しい物を買うのも父や子供のことを優先していた。それで、母自身のものは後回しにすることが多かった。

こんな状況だったから、父や母の里帰りはめったにできない状態だった。私たち姉妹も、親戚のおばさんやいとこ、そして父方の祖父母と会うために田舎に帰ることが子供の頃はあまりなかったのである。

⑧

時は流れ、私たち姉妹は学校を卒業した。私と妹それぞれ就職し、給料が出るようになると経済的にゆとりをもてるようになった。

お金にゆとりが出てくると、今まで行けなかった場所に行ってみたいという思いがふつふつと湧いてくる。

それで、皆が夏休みをとりやすい時期を調整して旅行の計画を立てるようにした。

いつも決まって「今年はどこに行く？」と言い出すのは私だ。

家族みんなの気持ちが覚めないうちに行き先とホテルを真っ先に決め、目的地まで何とか

安い料金で行けるように考えた。

例えば近くの観光地である天橋立や和歌山へ行くのに、交通費の節約で運転免許を持っていた父や妹に頑張って車を運転してもらったこともある。

また、格安の団体ツアーに申し込んで北海道へ行った時があった。飛行機に乗って現地へ行く。そして、バスでパッチワークの丘がある美瑛や帯広などをまわった。

観光を楽しんだあと、トマムのホテルに宿泊。到着した日の夕食はカニの食べ放題プランである。私たちは、日頃めったに食べられないカニを思う存分満喫した。

翌朝、目が覚めて窓の外を見ると、ホテルのまわりを取り囲むように気球が上がっている。絵の中で見るようなのどかな風景だった。住んでいる場所とはかなり景色が違い、それを見ているとゆったりとした気分になった。

他に行った旅行先では、今まで縁のなかった川下りをプランの中に組み込んだ。大自然の中を川下りの船で巡ることによって、清々しい気持ちになったものだ。

こうして、1年に1回は家族で日本国内の旅行に行くことができるようになり、それが私たち家族の最大の楽しみだった。

やがて、先に妹、そして、私が結婚してそれぞれ家庭を持つようになると皆でそろっていく家族旅行もなくなっていく。

そのかわり、父と母は団体ツアーやバスツアーを申し込み、今まで行くことができなかったところへ頻繁に出かけている。

二人で旅行することは、父と母にとって最大の楽しみになっていく。

そんな中で、妹に子供、父と母にとっては孫が生まれた。

孫が生まれてから、父と母は何か都合をつけて、孫の世話のために妹の所へ行くことも多くなった。そして、時には妹家族と一緒に日帰り旅行を楽しんだのである。

私は、結婚後に転職した。なぜなら、以前の仕事は交代制で休みは一定でなかったので昼間に仕事ができ、夫と同じ日に休むことができる職場に行こうと考えたからである。

しかし、仕事の内容が以前の職場と全くちがっていたので悪戦苦闘の日々が続いた。仕事が終わると、寝るためだけに家へ帰っているようなものだった。

ストレスが多い毎日が続いていたので、その反動から、仕事が休みの日は鬱憤を発散するために夫と2人で大好きな旅行をすることが多くなっていく。

私はこんな生活を送っていたので、父と母の家を月一回行けるかどうかという状態だった。

⑨

私は職場を変わってから、サービス残業で職場に残ることが多く、自分の体のことは二

の次になってしまった。こんな状態が続いたら、いつかは体を壊すのではないかと思いがら毎日を過ごしていたが、それが現実となってしまふ。

ある日、私は腹部に強い痛みを感じた。時が経つほどに痛みは増してくる。

もともと医者さんに診てもらうのは嫌いだったが、この時は我慢できなくなり家の近くの病院へ。しかし、そこでは処置ができないと言われた。それで、設備の整った病院を紹介されたのである。

紹介先の病院で1カ月以上かけて精密検査をしたところ、子宮にがんができていることが判明した。それも入院して手術で子宮を全部摘出しないといけない状態だった。

夫はもちろんであるが、父や母も心配のあまり主治医の先生との話に立ち会ってくれた。

主治医の先生の話から程なくして入院となり、そして手術を受ける。その後は、残りのがん細胞を排除するため抗がん剤の治療が始まり、目まぐるしい日々を過ごした。

私が、入院すると母は余程心配だったのだろう。母自ら病院までの交通機関を調べ、それをメモ帳に記入した。そのメモ帳を見舞いの時に必ず携帯して、一人で自宅から電車を乗り継いで毎日のように来てくれたのである。

時には父も「大丈夫か？」と言って母と一緒に見舞いに来てくれた。

大人になっても、父や母にとって私はいつまでも子供である。母はあまり一人で出かけることをしない人だったが、自分よりも先に『がん』という重い病気になった娘のことが心配で毎日見舞いに来てくれたのであろう。

退院後、通院で抗がん剤の治療をすることとなっても、母は病院に付き添ってくれた。

こんな風に心配して手伝ってくれる母に、抗がん剤の影響で脱毛が始まり、私の髪が抜けてしまった状態を見せることができなかった。娘が、自分よりも先に『がん』という病気になることは、母にとって衝撃だったろう。その上、娘である私の脱毛した姿を見せることは、母には衝撃が強すぎるため申し訳ないと思ったからである。

⑩

私の治療は、家族の助けもあり順調に進んでいった。抗がん剤の投与が終了すると体調も以前のように戻っていく。病院へは経過観察で定期的に通院する必要があったが、徐々に気持ちも前向きになった。

そして、仕事ではいろいろとしがらみがあるものの、両親、夫、妹家族の支えで少しずつ障害を切り抜けてきた。

私は、体調が良くなりつつある中、それまでいろいろと心配をかけた母に何かしたいと思いはじめていた。母にとってどんなことをしたら喜んでくれるのだろうか。

いろいろと考えたうえで、『いちばん良いのは、母の故郷の長崎へ一緒に行くことだ。』と心の中で決めた。父には申し訳なかったが、母の気分転換にもなる。

私が、このことを伝えると母は「お金がかかるから、ええわ。」と遠慮がちに言う。

母の性格上、一度は必ず断るだろうと想定していた私は、後日半ば強引に旅行会社に申し込んで長崎行きを決めたのであった。

長崎へ行くことが決まってから、母は言っていることとは裏腹にうれしそうな表情をいつも見せていた。

「長崎へ行くにはお金がかかるからねえ……。」と遠慮していた母だったが、心の中ではとても行きたかったのであろう。出発するまでの間、伯母へのお土産を買ってきたり、新しい服を新調したりと忙しくしていた。

「旅行の準備で大変やわ。」とぼやきながら、母はとても楽しそうにしていたのである。

そうこうしているうちに長崎へ出発する当日となった。

空港までは、電車やバスを乗り継いでいかなければいけない。移動する時間を考えて私と母は朝早い時間帯に駅で待ち合わせた。

父も、朝早く起きて母の荷物を持ち駅まで見送りに来てくれた。別れ際、父は「ひとり家でおいしいもの食ってゆつくりするわ。」と強がっていた。

こんなことを言う父だが、本当は母がいない自宅へ戻るのは寂しかったのだろう。

母は、空港へむかう電車の中で「留守にする間にお父さんが困らないように、おかずをいくつも作っておいてきたわ。でも、今までは食べものの買い物を私がすべてしていたけど、最近はお父さんひとりで近くの店に行ってお弁当を買って食べることもできるようになったのでよかったわ。」と笑いながら言った。

私はそれを聞いて苦笑いしながら『お父さんもずいぶん進化したね。』と心の中で思った。それまでは家のことは何もしない、すべて母に任せきりの父だったからである。

空港へは出発の1時間前に着いた。私と母は荷物をチェックインカウンターで預けた後、喫茶店でコーヒーとパンを注文しておなかを満たした。

そのあと、私も母もウィンドウショッピングが好きなので、搭乗時間まで空港内の売店を巡ることになった。

ちよつと買いたいなあと思うものがあっても、空港内の売店は私が住んでいる所より値段が高い。

私は、根がケチなところがあるのですぐには買わない。

母も父と結婚してからお金のやりくりに苦労していたので、節約しなければならないということが身についていた。だから、私と同じように欲しいものがあってもすぐには買わない性格である。母娘だからそんなところは似ているのだろう。

ぶらぶらと空港内の売店を巡っているうちに搭乗する時間となったので、私と母は飛行機に乗り込んだ。

飛行機の中では、外の景色が見ることが好きな母が窓際の席に座った。母は、まるで少女のように飛行機の窓の外の景色をくいるように見ていた。とてもうれしそうだった。

長崎空港に着くと、お昼の十二時を過ぎていた。二人ともおなかがいっていたので、空港のレストランに入ることとなった。

母は席につくと『大村寿司』を注文した。長崎空港は大村市にあるが、『大村寿司』はその地の名物だそうだ。

私は長崎の皿うどんが好物だったので、迷わず注文した。他に、豚の角煮が白いパンに挟んでいる角煮バーガーを2つ頼んだ。母は注文したものをおいしそうに、きれいに食べてしまったのである。

おなかが満腹になった後、空港バスに乗って長崎市内へ。

バスに乗る前、母が「最初に千羽鶴を平和公園に持っていきたい。」と言いだした。それで、母の希望を叶えるため最初に平和公園へ行ったのである。

平和公園に着くと、母と私は、荷物を持って平和祈念像のところへむかった。

むかう途中で、母は「暑いね。あの日もこんな風に晴れていたわ。」とぼつりとつぶやいた。原子爆弾投下の時、母は子供だったが、鮮明に当時のことが頭に残っているであろう。私には、それ以上母の思いを聞くことができなかった。

そして、平和祈念像の横にある折鶴の塔に、母は、自ら毎日こつこつと折った千羽鶴を納め、長く手を合わせていたのである。

平和公園をあとにして、今度は大浦にある祖父母のお墓に行くことになった。グラバー園方面の路面電車の終着駅から少し歩いたところにある。

荷物を持ってお墓まで行くのにかなり時間がかかりそうだった。

私は「お母さんタクシーで行こうか。」と言うと、いつもお金のことを心配する母であったが、すんなりと賛成した。

母も疲れていたのだろう。それによく晴れていてとても暑い日だったので、母自身も歩いてお墓まで行くのは大変だと思ったのに違いない。

長崎市内はタクシーが比較的多く走っており、すぐに道端でつかまえて乗ることができた。タクシーに乗ると車の中はとても涼しい。ほっとした状態になった途端、あっという間に目的地のお墓周辺に着いた。

長崎は坂の多い町であるため、傾斜地にお墓が建っているのをよく見かける。祖父母のお墓も同じように傾斜地に建っているので、タクシーが到着した地点から階段を何段か上がらないといけない。

母はお墓へ行く階段をのぼる前、昔からそうであったが、必ず近くの店でお花と線香を買った。

それから、店の人にバケツを借り、公共の井戸からお水をもらいお墓へむかうのである。階段をのぼったあと、祖父母のお墓へ行くまでに一般住宅の裏手にあるかなり狭い道を通る必要がある。母は、年齢の割に足はまだ達者な方だったので、そんな狭い道もすいすいと先に歩いていった。

一方、私は水が入ったバケツを持ちながらこわごわと歩いていたので、母のところへ追いつくのに少し時間がかかってしまった。

お墓に着くと、母は率先して掃除を始めている。

そして、お墓の周りがきれいになるとお花と線香を供え、「やつと来ることができたよ。」と眠っている祖父母に話しかけながら手を合わせた。

そのあと母は、「久しぶりお墓参りができてよかった。ありがとう。」とにこやかな表情で言った。

お墓参りが終わると、その日は時間が遅くなったので宿泊するホテルへ。

ホテルに着いてから「おなかすいたわ。何か食べに行こうよ。」と私が言うと「そしたら、ちゃんぽん食べに行こう。」この母の一言で私たちは中華街にむかった。

中華街に着くと、どの店にするか見てまわった。夕食時なので、どの店もお客さんでいっぱいである。結局、以前からよく利用しているなじみのお店に入った。

店に入り、順番がきて席につくと母はちゃんぽん、わたしは皿うどんを注文した。料理が来るまですぐ長く感じたが、料理がテーブルに運ばれると同時に二人ともあつという間に平らげてしまったのである。

おいしい料理を頂いた後、ホテルへ戻ってゆっくりとくつろいだ。そして、ホテルのベッドに横になると母も私も疲れていたのかすぐ眠りについた。

翌日は、母の姉である伯母の家にタクシーでむかった。久しぶりの再会で大いに話が盛り上がった。母は、とても楽しそうに笑いながら伯母との会話を楽しんで過ごした。

こうして、長崎での予定は過ぎ去っていった。

私は、母が満足してくれればそれでよいと思ったのである。

⑫

長崎からそれぞれの自宅に戻った。地元に戻ってからはかなり暑い日が続いていたのだ。そんな毎日を過ごしていたある日、母からの電話・・・・・・・・。

「体じゅうにしっしんができてすぐかゆいのよ。」

特に汗をかいた時はしっしんがひどくなってしまうと話していた。

父も心配して一緒にかゆみの原因を知る為に病院を何か所かまわった。けれども、どの病院もはっきりとした診断が出ない。

しかし、暑い時期を過ぎ去ると同時に母のしっしんはおさまった。が、また暑い時期が来るとこのような症状がでてしまう。そんな状態が2、3年続いたのである。

父は、足の膝などの関節が痛み出し、歩くのもしんどい状態が続くようになった。

自宅は、階段しかない団地の5階だったので、階段の昇り降りがつらくなってきたと言いつ出した。

それで父も考えたのであろう。母に「このまま足が悪くなれば思うように外出もできない状態となる。どこか、階段の昇り降りがあまりないところに引っ越そうかと思う。」と伝

えた。

若い頃は「俺は、家は持たない。賃貸でいい。」とよく言っていたのに、年をとると体のこともあり考えが変わったようだ。

父は将来を考え、家のことですぐ行動に移した。散歩がてらにいろいろ周辺の中古の家を見て回ったり、また不動産屋に行ったり……。とても積極的に動き回ったのである。そうした行動のおかげで、元々住んでいた団地から近いところに中古の家を見つけることができたのだ。

父が言うには、「その中古の家は、駐車場もついているわ。」と私たちに教えてくれた。しかしよく聞くと、家の外側だけを見て購入を判断しているようである。

私は心配になって「家の中まで実際に見てみないと、本当に住めるのかわからないよ。」と忠告した。

父がやや不機嫌そうに「わかった。そしたら今度みんなで家の中を見せてもらおう。」と言って、すぐにその場で家を管理している不動産屋さんに連絡した。娘に指摘されたので、余程くやしかったのだろう。

そして後日、私たちは家の中を見せてもらうことになった。

家の内覧の日。母と妹、私は父と一緒に不動産屋さんの待ち合わせの場所へ行った。不動産屋さんはすでに来ており、鍵を開けて家の中を見せてもらった。

かなり年数が経っているため、ところどころ壊れている所がある。2階の部屋の天井板が破れ、天井裏が見える状態で、私は『大丈夫かしら？』と不安に思った。

以前住んでいた人は、父と母の年代より少し年上で足が悪かったのだろう。お風呂やトイレに手すりがついており、階段は手すり以外に滑り止めのシートを張っていたので、年齢を重ねていく父と母にとってはよかった。

父も家の中を見て「よし、気に入った。ここを買おう。壊れている箇所はリフォームすれば何とかなるだろう。」と言って不動産屋さんに「話を進めてくれへんか。リフォームをすること前提でよろしく。」と伝えた。

私は「本当にここでもいいの。大丈夫。」と念押しした。

父はVサインをしながら、「大丈夫。大丈夫。」と言ったのである。

母と妹、私はそれをみて、父が今まで『持ち家はいらない。』と主張していたのに全く逆のことを言いだったのであきれていたが……。

家の購入を決めた後は不動産屋さんと登記の移転などの手続きやリフォームの打ち合わせなどで、父と母は毎日忙しく過ごしていた。また、支払いについては高齢のためローンを組むことは出来なかったもので、「一括で払ったわ。」と父は言った。

リフォームが始まると父は膝が痛いにもかかわらず、ほぼ毎日新居を確認するため散歩に出かけた。

現地では大工さんに会い、リフォームの進捗状況を聞いたのである。

父も新しい生活が始まると思うと毎日わくわくとした気分だったのであろう。

そうこうしているうちにリフォームが一通り終わり、今度は引っ越しの準備である。

私と妹は、二人が高齢であるため大丈夫かと心配していたが、「大丈夫。大丈夫。引っ越し業者さんに荷物をまとめるのもお願いするコースにしたから。」と父と母はにつこりしなから言った。

しかし実際は、多少荷物の移動などで若干の微調整が必要だったため、結局私と妹は手伝いに行ったが・・・・・・。

父と母の新居への引っ越しがようやく終わると穏やかな日常に戻っていった。ただし、父は新居に来たことが余程うれしかったのか、自分でかざり棚を作ったり、パソコン台を作ったりと思いついたら何かを作っていた。

父の趣味が広がったことは良かったものの、そのために材料として購入した木材が増えてきたので、母はそれをみていつも渋い顔をしていたようだ。

父と母の新居が広くなったこともあり、孫たちは「おじいちゃん、おばあちゃんのところへ行こう。」と言って頻繁に遊びに来てくれた。時には、孫たちと一緒に近くのレストランに食事に行ったり、妹の車で一緒に日帰りで遊びに行ったりしている。

私も仕事が平日休みとなると、父や母から誘いの電話があり、時々一緒に出掛けていた。

父が「家を買う。」と言い出した時はどうなるかととても心配した。

しかし、父と母二人にとって、とても良い方向に向いてよかったのである。

⑬

そんな毎日を過ごしていたある日、父は胸に違和感を覚えた。余程しんどかったのである。病院嫌いの父が自ら病院に行くと言い出したほど、胸の苦しさが尋常でなかった。

そのため、母と一緒に急遽近くの病院へ。

病院に到着して医師による診察の後、現在の体の状況を知る為に様々な検査を受けることとなった。病院嫌いの父が、いつもの元気がなくおとなしく医師の言葉に従ったのである。

検査の結果、心臓に血液をおくる血管が9割ほどつまっている状態であるとわかった。いつ倒れてもおかしくないと医師から告げられた。

緊急に手術をしなければならなかったが、診察してもらった病院では手術ができない。

このため、診察を受けた病院から手術が可能な大学病院を紹介された。その大学病院は、父と母の家から車で1時間以上かかる遠い病院だった。

父は、このような体の異変を娘である私と妹に教えてくれなかった。

しかし、病院に入院するとなると保証人が必要となってくる。それでやむをえず、父は長女である私に詳しいことを言わないまま「保証人になってほしい。」といきなり言ったのである。

保証人の話が出た時、私は「理由もわからないのに保証人になることはできない。きちんと理由を教えてほしい。」と父を問い詰めると、そこでやっと詳しく話してくれた。

父から心臓の疾患のため手術をしなければならないと聞いた私は「保証人の話はわかった。

入院する時は病院へ一緒に行くからね。」と伝える。

父は娘たちに『余計な心配をかけたくない。』という思いだったのだろう。それで、理由をはっきりということができなかったにちがいない。

ワンマンな面もある父だからこそ、娘である私に自分の弱いところを見せたくなかったのだ。

父の入院の当日。妹に車を運転してもらい、家族そろって病院へむかった。父と母の家から1時間以上かかる。少しでも気持ちや和らぐように父に話しかけるが、普段と違って会話がすぐ途切れてしまう。

こんな重い空気の車内の中、病院に到着するまで実際かかる時間以上にすごく長く感じられた。

病院に着くと、主治医の先生からの説明があるので付き添いの家族も診察室に入るよう言われた。

そのため、父本人、母、妹、私は診察室の中に入り、主治医の先生から治療方針についての詳しい説明を聞く。私は説明を聞いているうちに、父が高齢のため手術に耐えることができるのだろうかと一抹の不安を覚えた。

主治医の先生からの説明が終わった後、そのまま入院手続きをおこなうために家族そろって受付へむかう。こうしてあわただしく時間が過ぎていったのである。

そんな中で、父も不安だったのだろう。いつもは饒舌な父なのに、主治医の先生の話や入院手続きの説明をおとなしく聞いていた。

ひととおり手続きが終わると、私たちは父が入院する病室に案内された。一人部屋で、窓の外から街の景色がきれいに見えた。

「お父さんいい部屋でよかったね。」と私が言うと、父は「よかったわ。」とうなずいてにっこり笑った。

そして、面会時間が終了に近づいたので、私たちは父と別れて病院を後にした。

病院からの帰り道、母が、父のために着替えや歯ブラシなどの日用品を買いに行きたいと言ったので、大型スーパーで買い物をするようになった。

母は、父のことを思うと不安だったのか、買い物をしていてもどこかうわの空であった。

翌日から毎日、母は父の見舞いに行った。ただ、電車を乗り継いでいくことは、母の体にとって大きな負担となったのだろう。見かねた妹が、車を運転して母の見舞いの送迎をしてくれた。

そして父の手術の日。

手術の方法は、心臓の近くにある冠動脈のバイパス術という方式だった。足にある血管の一部を心臓の冠動脈側に移植しておこなうものである。

その日、私は仕事で父の手術に立ち会うことができなかった。仕事の最中でも父の手術が

いつ終わるのかと気になりつつ、母と妹からの連絡を待っていた。だが、終了予定の時間になっても連絡が来ない。やむをえず、私は仕事が終わってから妹に連絡を入れた。そしたら、ちょうど手術が終わったところで主治医の先生と話していたという。

「予定の時間より長くなっただけ、無事終わったよ。」と妹から聞き、私は胸をなでおろした。

手術後、父は家へ帰ることを目標に、早い時期から自分の力で歩く等のリハビリを開始する。

父の様子を見てみると、このまま家に帰ることができるのではないかと私をはじめ、母、妹もそう思っていた。

しかし、主治医の先生からいったん自宅近くの最初に診察を受けた病院へ転院するように言われる。

⑭

転院後、父の状態が一変する。手術の後遺症で、難病指定されるほどの血液の病気を発症し、徐々に起き上がることができなくなった。

母は、そんな父のことが心配で毎日病院へ通った。心労でかなりやせてしまい、母の様子を見ていた病院のスタッフの方が気遣ってくれたのである。

私も父の状態が信じられず、きつとよくなると祈りながら、毎日仕事の帰りに見舞いに行った。

見舞いに訪れたある日、私は父に元気を出してもらうため「食べないとあかんぞ。」と話した。そしたら、父の方から「ちゃんぽん食べたいなあ。チーズ食べたいなあ。」と言ってくれたのである。

私はうれしくなって「わかった。何か買ってくるわ。」少しでも早く父の希望をかなえてあげるため、急いで病院の売店へ。ちゃんぽんは用意できなかったので、チーズを数種類買った。

病室に戻り、父に「食べて。」と言ってチーズを渡すと少しずつであるが食べてくれた。でも全部食べることができず、父は「もういらん。しんどいから横になるわ。」と言って、私に残りのチーズを渡して布団の中にもぐったのである。

程なくして父の体力は徐々に低下し、そして完全に起き上がれなくなった。

ただ、父は、母へこのような状態になる前に自分の思っていること、家のことを書いた手紙を渡していたのである。

この時すでに、父は自らの命の期限が迫っていると感じていたため、母への遺言として渡したのだろう。

やがて、父は自力で呼吸をすることが難しくなり、酸素マスクをつけなければならない

状態となる。そのため、私たちと直接話ができることが難しくなった。入院している部屋も一般の病室から集中治療室へ変更となった。

できるだけ、父と会う時はこちらから話しかける。

「はよ、元気になって家に帰らないと。」ということを何度も父に伝えた。

その都度、父はわかってきているのか、目をかっと見開いて私の顔を見つめていた。

⑮

7月の下旬、病院から連絡があった。

「お父様の状態が思わしくないので。ご家族と一緒に過ごして頂くため、お父様を集中治療室から特別室に移動して頂こうと思いますが、よろしいですか。」

私は父との別れの時期が迫っていると心の中で思ったが、一方ではこれは現実のことでない、夢であつてほしいと受け入れ難い気持ちもあった。

しかし時は待つてくれず、その時は刻一刻と迫ってくるのである。

そのような状況の中、私たち家族は病院が用意した特別室に泊まることとなった。

父は、まだ生きたいという気持ちのあらわれなのか、一晩中、腕をしきりに動かす。

そういえば、父が元気な頃に百歳になっても走れるように体力づくりをしようと言っていたのに……。父の両親は、九十代まで長生きしていたので、自分も長生きできると思つてそういう風によく話していた。

そして、父は母の原因不明のしっしんのことを気にかけていた。ワンマンなところもあったが、大好きな母のことが心配だったのであろう。

父のことが気になっていたが、私はいったん仮眠をとるために母と妹にお願いして自宅へ帰った。

横になって寝ようとするが、父のことが気になってすぐに目が覚めてしまう。

十分に休息することができないまま、夕方になったので夫とともに病院へ戻った。

病室の中に入り、私は父が寝ているベッドの横に座った。

母と妹たちは「少し家に帰って休んでくるわ。」と言つて病室から出ようとしている。

その直後であつた。モニターに表示されている父の血圧と心拍が急激に下がっていく。

私は急いで、家へ帰ろうとした母、妹たち家族に「すぐ戻ってきて。」と大声で叫んだ。

あわてて母や妹たちが病室へ戻ると、父はみんなが揃つたのを待っていたのだろうか……。

徐々に、モニターの血圧と心拍数が下がり、ついには0となったのである。

父が永遠の眠りについた瞬間であつた。

母は、呆然として「これからどうしたらいいの。」と泣いていた。他のみんなのすすりなく声が聞こえた。私は、この時あまりに突然であつたため、涙も出なかった。

このような状況の中、病院の担当者からこのまま病室に父の遺体を置いておけないと言われる。父の遺体を安置している部屋の費用を払うから、もう少しこのままにしてほしいと話したが、規則であるからと病院側はきいてくれなかった。経営上の問題かもしれないけど、亡くなったからすぐに出て行きなさいという病院の姿勢は、身内の私からすると冷たい対応と思っただのである。

しかし、こう言ってもいられない。母は、父が亡くなったことで気持ちが動転しているから長女の私が後の手続きをしていかなんといけない。妹から近くの葬儀屋さんの電話番号を聞き、先方に事情を説明したうえで葬儀の手続きをお願いした。

程なくして、葬儀屋さんが病院へ車で迎えに来てくれた。私は、荷物をまとめて父の遺体と一緒に葬儀屋さんが用意したその車に乗って葬儀会場へ。

他の家族は、後から葬儀会場に来てくれることになった。

葬儀会場へむかう車の中で、父の遺体の横に座りぼんやりと外を見ていた。三か月前の父はまだ歩いて何でもできていたのに。どうしてこんなになったのだろう。いったん家に帰してあげたかったと思いながら……。

⑩

葬儀会場についてから、係の人との費用や式の内容などを話して決めた。他の親戚は遠方にいるため、母、妹家族、私家族のごく身内のものだけで式をとりおこなうことにした。父から生前より「わしが亡くなったら親戚は呼ばなくていいから。お前たちで見送ってくれ。」と常々聞かされていたからだ。

葬儀屋さんとの手続きが終わった後、一晩中、母・妹家族・私家族は交代で父のそばにいた。柩から見える父の顔は、安らかであった。

そして葬儀の日。

仮眠から目覚めて会場の様子を見に行くと、父の遺影のまわりには、たくさんのちいさなひまわりの花がいっぱい飾られている。

この遺影は「孫たちと一緒に撮ったこの写真がとてもにこやかでいい表情をしているから使ってほしい。」と母が持参したものだ。いつも渋い顔をしていることが多かったが、孫たちと一緒にだったので、うれしい思いが自然と顔に出ていたのだろう。

それから、私は父が生前食べたいと言っていた『ちゃんぽん』の即席カップ麺を買って遺影から見えるように置いた。

本当は、ちゃんぽんをちゃんと作ってお供えしたかったが……。

式がひととおり終わると、父のなきがらは霊柩車に乗って火葬場へむかった。太陽がさんさんと照り付ける暑い日だった。

その後、父は小さくなって私たちのところに帰ってきた。

⑰

父が亡くなってから、いろいろな手続きが私たち姉妹に降りかかってきた。役所での手続き、自宅登記の移転、相続する預貯金などの名義変更をしなければならぬ。

母は父が亡くなったことで一時、何かする気力を失っていたからだ。

そのため、母ができないところは私たちで手分けして手続きに走り回った。そうしないと母の生活が落ち着かない。

特に、自宅の登記の移転の際は、何度も法務局へ母と一緒に足を運び、予約を取って書類の書き方などを担当の人から教えてもらったのである。

専門家をお願いすればスムーズにできるが、お金が余分にかかる。母がこれから一人で暮らしていくのに少しでもお金を残さないといけないという思いがあった。それで自分たちの力でおこなうことを選択したのだ。

しかし、書類の作成以外にも戸籍謄本など取り寄せる必要がある。父は、戸籍を生まれ故郷から結婚直後の長崎の住所地、そして大阪への転居先の住所地、その後また生まれ故郷の住所地と何回か移転させている。そのため、登記移転に必要な戸籍謄本を取り寄せるのに、父の生まれ故郷をはじめ、過去に移転した戸籍をその市町村に依頼して取り寄せるという作業をしなければならぬ。一連の手続きなどをおこなうのにかなり時間がかかってしまった。

何とか自宅の登記関係や役所関係の手続きが落ち着くと、今度は父の納骨である。

早く納骨をしてあげないと父も露頭に迷うだろう。母と妹とも相談した上で父の遺骨は永代供養ができるお寺にお願いした。

父が生前に「跡継ぎがいらないからお墓をつくらず、永代供養ができるお寺でお願いしたいなあ。」とよく話していたからだ。

このように、父が亡くなった後の手続きが多かったので私は悲しみにひたることもできなかった。

一方、父がいなくなった後、母の落ち込みは日々増してくる。

以前、二人で生活していた時は、よく言いたいことを言い合ってロケンをしながらも楽しく生活していた。が、心の準備もないまま病気がわかってから三か月という短い期間で父と別れなければならなかったからである。

私も母と同じくまさか父がこんなに早く逝くと思ってなかった。母の心情は身に染みてわかる。これは、妹も同じ思いであろう。そして、父が可愛がっていた孫たちも同じ思いだろう。

しかし、私と妹は、このままだと母が認知症を発症しかねないと考えた。そうになると、母自身が一番困ることになる。

私がまずできることとして、母に毎朝メールを入れてみようと思った。少しでも母を元気づけるためである。仕事の帰りは、母に電話をして一日のことを短くでもいいから話そうと自分の中で決めた。

メールを母に入れた初めての日。『おはよう。朝早くどうしたん。』と驚いてメールを送

りかえしてきた。

『今まで、メールを朝から入れることなんてしなかったから、お母さんが驚くのは仕方がないかな……。』と心の中で思いつつ、私は『お母さん大丈夫かなと思って、それでメールしたんよ。』と返信した。

そして、仕事帰りに初めて電話した時も母は同じように驚いている。

が、毎日電話をするようになると「おかえり！」とうれしそうな声で返してくれた。

一方、妹は母が落ち込まないようにいろんな習いものをすすめてくれた。

母は、最初「しんどいからいいわ。」とあまり乗り気でなかったようだ。

ある日、妹は介護の必要がない方が行くデイサービスを見つけ、母に紹介する。

したら、母が少し興味をもったので一日体験を申し込んだ。

実際に体験した翌日、母に「どうやった？」と聞くと「すごく楽しかったわ。」目を輝かせて言った。その後、本格的にはぼ毎日行くようになったのである。

デイサービスの中で工作の時間があるが、母は、その時間に他の人の手伝いを率先しておこなっていた。もともと手先の器用な人で、物をつくるのが上手かった。その特技を生かして他の人の手伝いをするという役目ができたことで新しい仲間づくりにつながったのだ。

⑱

母の生活は徐々に落ち着きを取り戻していった。

私は母により元気を出してもらうため、一時中断していた母の故郷の長崎へ行く計画を立てたのだ。

「久しぶり長崎へ行こうよ」と誘ってみたが、母は案の定「お金がかかるから。」と言って渋った。

昔からお金がかかることは控えようとする母だったので、私は『やっぱり……。』と心の中で思いつつ「何とかするから。」と半ば強引に旅行会社に申し込んだのである。

こうもしないと前に進まないと思ったからだ。

母は、最初文句を言っていたが、そのうちに長崎へ行けると思うとうれしいのか自然と顔がほころんでいることが多くなった。

そして、長崎へ行く準備やお土産を買いに店へ出かけることも多くなり忙しそうにしていた。

いよいよ、待ちに待った長崎へ出発する日が来た。前回と同じく飛行機での移動となる。

長崎行きの飛行機から外を見ると、きれいな青空だった。下の方を見ると雲が一面に広がっている。まるで雲のじゅうたんの上を飛んでいるようだった。そんな景色の中、母は前と同じく窓際の席に座ってうれしそうに眺めていた。

長崎空港に到着した時は、お昼だったので二人ともおなかがすいていた。

以前と同じように空港内のレストランに入り、母は大村寿司のセット、私は皿うどん、そ

して角煮バーガー2つを注文。おいしそうな料理が来ると二人とも夢中になってあつという間に平らげてしまった。

その後、長崎空港からバスに乗った。バスは長崎市内にむかって緑が多い山の道を走り抜けていく。

今回は、最初に母の姉である伯母の家へ。空港から1時間ほどで到着した。

母は、久しぶりに伯母と会ったからだろうか、とてもいきいきとした表情になったのである。

母は、部屋に入って落ち着くと、伯母につれあいである父が病気を発症した当時のことや入院後は毎日のように見舞いに行っていたこと、そして治療のいかにもなく父が病気発症から3カ月で亡くなった日のことを時折、目をうるませながら話した。

また、幼い頃から父との新婚時代にかけて長崎にいた時の昔の思い出も夢中になって話していた。そんな母の話を伯母はじつくりと耳を傾けてくれていた。

こうして、母と伯母との貴重なひとときは過ぎていったのである。

伯母との再会の後、私たちは平和公園にむかった。

平和公園に到着すると、以前、長崎に来たときもそうであつたが、母は自らこつこつと作った千羽鶴を平和祈念像の横にある折鶴の塔におさめたのである。

そして、平和公園をあとにし、今度は母の両親が眠るお墓へ。母の体力のこともあり、タクシーを利用してむかった。

到着すると、いつものように近くの店でお花と線香を購入してから、祖父母が眠っているお墓のある場所へ行き、そこで手を合わせたのである。

こうして、一連のことが終わると母は安堵したようであつた。

長崎から帰って翌年に、今度は母の姉である伯母が大阪に来てくれた。父のお骨が納められているお寺におまいりをしてくれたのである。

母は、伯母が滞在中、余程うれしかったのか頻繁にいろいろと話していた。

⑬

私は、母が少しでも前向きな気持ちを持ってもらうため、故郷の長崎へ毎年一緒に行くことにした。

母にとつての楽しみができると体の調子も良くなったのだろうか。悩みの種だった皮膚のしっしんもいつの間にかおさまっているようだった。

しかしそんな日々は、世界的に広まった感染症で母が楽しみにしていた長崎行きを阻まれてしまう。感染症の爆発的流行によって世間全体が、行動を自粛する風潮となつていったのだ。

私は、何とか感染対策をしても、母と伯母が会える機会をつくれないものかと思案した。けれども、連日のように高齢の人が亡くなる報道を目にする。

そのような現実やふたりの年齢を考えると、感染率が高く命の危険性もあるので無理に長崎へ行くことができなかった。

このことが後で悔やまれることになってしまう。

母は、世間が感染症と騒いでいた時期でも比較的元気に毎日を過ごしている。

ただ、母にとつて誰にも会わない日が続くことは良くないと私と妹は感じていた。

それで、私は連絡やメールを毎日続けることにより出来るだけ母が寂しくないように心がけた。妹は車の運転ができるので、休みを見つけては母を外に連れ出してくれたのである。

そして「お母さん、短い時間でもいいからデイサービスも続けた方がいいよ。」と母に何度も話した。

私たち姉妹やデイサービスの皆さんの後押しで、母は以前のようにデイサービスへ行くことを再開。その後は、ほぼ毎日参加している。

母は、「相変わず、他の皆さんの物づくりや手芸のお手伝いをしているから、私の分は後回しやわ。」とよく笑いながら言っていた。

こんなふうに言うものの、母にとつて他の人の役に立っているということが何より生きがいにつながったのであろう。

私と母との毎日のメールや電話のやりとりの中でも、デイサービスでの出来事を楽しそうに話してくれた。

そして、仕事帰りの電話での母の第一声は、必ず「おかえり！」だった。それを聞くと一日無事に終わったと思って私はほっとしたものである。

毎日穏やかに流れていた。こんな日がずっと続くと思っていた。

⑳

穏やかな日々を過ごしていたある日、仕事が終わってから私はいつものように母へ電話をかけた。

いつものように「おかえり……………」と言ってくれたが元気がない。

私は、「お母さんどうしたん？ いつもと様子が違うけど……………」と言うと、母が不安そうに「最近、胃の調子が悪くて……………」と話し出したのだ。

2、3日前から胃のむかつきが強くなり、以前よりも食べることができなくなったらしい。そのことを聞いて「胃の調子が悪いのが気になるようだったら、早く近くの病院へ診てもらった方がいいよ。」と私は母に言った。

翌日、母は妹にも胃の調子が悪いことを相談した。私と同じことを妹も言っていたので、ようやく近くのクリニックを受診する決心がついたのである。

母は、後日近くのクリニックを受診、その日にすぐ検査をしてもらったとつきそっていた妹から聞いた。

私が気になって母に電話をかけると「検査の結果が後日わかるから、クリニックへ行つて

くるわ。」と話していた。

私はこの時、母は以前より胃炎を患っていたので、そのことが原因だろうと軽く考えていたのである。

一方、妹は母の体調が気になっていたもので、近くのクリニックでなく比較的设备が整った病院へ母を連れて行ってくれた。が、その病院でも検査をした結果がわかるのが数日後という。

病院受診した日以降、母は、だんだんと元気がなくなっていった。妹の子供たちも心配して様子を見に行ってくれていたが・・・・・・程なくして、とうとう母は起き上がる事ができなくなってしまった。

受診した病院の検査結果を待っていると母の状態がどんどん悪化してしまう。

その病院は父が亡くなった時にあまりよい扱いをされなかったため、妹家族とも相談して夜間診療で市立病院へ行くことになった。

市立病院へ行く前に、母の症状を話すと「すぐ来てください。」と言ってもらえたのはとてもありがたかった。

私は、妹や妹の子供たちと一緒に母を抱きかかえて車に乗せた後、病院へ向かったのである。

病院に到着後、救急担当の先生に母の状況を再度説明した。緊急でCTなどの詳しい検査をおこない、その結果、首のあたりに白い影があると救急担当の先生が話してくれた。母はうつろな表情で、こちらから声をかけてもしどろもどろといった状態である。自宅に戻るのには難しいと救急担当の先生は判断し、その日から入院となった。

しかし、時代は、世界的な感染症のため病院に入院すると面会も制限される状態である。私と妹は、母が入院することではなかなか会えなくなるかと思うと心配でたまらなかった。

②1

様々な検査の結果、母の病気が判明する。

『成人T細胞白血病リンパ腫』

主治医となった先生によると、この病気は九州地方の出身者に多く、母乳を通じて感染する病気であると説明を受けた。

しかし、私は母が長崎で被爆しているのでその影響もあるのではないかと思った。

そのことを主治医の先生に聞くと被爆との関与はないとは言っていたが・・・・・・でも、高齢になってから赤ん坊の時に飲んだ母乳の影響が出るだろうか、やはり被爆した影響もあるのではないかとその時思ったのである。

一番ショックを受けたのは、母の命がこの時点で3カ月、夏を越せるかどうか知らないことと主治医の先生から余命宣告を受けたのだ。

そのことを聞いて、正直な気持ち信じたくない、受け入れ難いものだった。妹も私と同じ思いだっただろう。

夢の中で聞いていることでこれは現実でないとも思ったが・・・・・・・・・・。
しかし実際、母の病気は急激に悪化しているのである。

そして、母には余命宣告されたことを話すことができない。若い頃に一度胃がんかもしれないと言われた時、母は寝込んでしまったほど気が弱いところがある。(その時は、あとで何もないとわかった。)

本当のことを言ったら、精神的にかなり落ち込んでしまう。母の性格を知っているから、私と妹は、本当のことを言わないようにしようと話した。

ほんの1か月前には、ちょうど妹と孫と一緒に木蓮の花が咲いているところで、楽しそうに写真を写していたのに。誰が、こんな状況を想像しただろうか・・・・・・・・・・。

②②

母は、病院に入院してから状態が安定すると、ベッドから降りようとするがあった。

こうした行為は、転倒のリスクがあり、大怪我につながる。

そのため、母との面会許可がおりた日に病院の看護師さんから呼び出された。

このような事実があったことを説明してもらった上で、母が安全に入院生活を送ることができるよう拘束の必要性があると言われる。

私は、それを聞いて正直ショックだった。

その時はやむをえなかったので、家族として『母の拘束に了承した。』と署名したものの複雑な思いでいっぱいだった。

別の日、入院中の母へ少しでも元気を取り戻してもらうように、飲み物やお気に入りのお菓子、折り紙などの差し入れを私と妹は交代で持っていた。

しかし、差し入れを持っていても直接母に渡すことができない。

病院の担当窓口へ預けて配達してもらうというシステムであるため、母は中身がわからないまま受け取っていたようである。

面会許可がおりた日に入院している部屋を訪れると、差し入れた物がそのまま袋から出されていない状態で放置されていた。

母に直接会って渡すことができたなら、このようなことはなかっただろう。

世界的に起こった感染症が原因で、そのようなことでさえ許されなかったのである。

その後、母は抗がん剤による治療を開始した。一時的であるが、抗がん剤で母の状態がよくなる。そして、がんによる痛みの訴えもなかった。

しかし一方では、副作用で脱毛の症状が顕著にあらわれたのである。

女性にとって髪の毛が抜けてしまうということは、誰だってショックである。母もこの状況が受け入れることができなかったようだ。

私が主治医の先生の許可をもらい見舞いに行くと「どうしてこんなになったの。」と涙目で訴えてきた。

私も以前、同じように抗がん剤による治療を受け、その後遺症で脱毛を経験していたが、当時このことを母に伝えるのは衝撃が強すぎると思って言わなかったことがあった。

それで「お母さんと会う時は、ウィッグをつけていたからなかったと思うけど、私も治療中は同じような状態だったのよ。」という、母は、驚いた表情で「知らなかった……。」

私のことを話すと、母は自分だけではないと思ったのか、気持ちが落ち着いたようである。これ以上、母が落ち込まないように病院内で販売されていたウィッグを購入し、早速つけてもらった。

新しいウィッグをつけた直後、担当の看護師さんが病室に入ってきて「あら、かわいい。」と言ってくれたようだ。

しかし、母はそのウィッグが少し長かったようで、ちよつと着け心地がよくなかったみたいだった。妹と相談し、新たに病院の購買部の方で短めのウィッグを再度購入したのである。

程なくして、『家に帰りたい。』という母の強い希望で、奇跡的に退院することができた。

②③

母は、「家に帰ったら、自分で何とかするから大丈夫よ。」と言っていたとおり、気丈にも一人暮らしを続けていた。

しかし、母が自分で何とかすると言っていたが、私と妹は心配だった。

だから、できるだけ母の元へ頻繁に行き、買い物などいろいろとサポートをおこなうようにしたのである。

最初に、母の病気のこともあり訪問看護師さんと体力が衰えないようにリハビリの先生に来てもらうように依頼した。

そのことに対して、かたくなに断っていた母だったが、私と妹があまりにもしつこく訪問看護師さんやリハビリの先生に来てもらった方がいいと言うので、最後はしぶしぶ承諾する。

本来、訪問看護やリハビリを依頼するのは介護保険が優先だが、母の場合、主治医の先生が余命宣告をしており被爆者援護法の支援で医療保険による依頼となった。

そのため、訪問看護師さんやリハビリの先生に思ったよりも早くきていただくことができたのである。

他に、母が自宅で生活するのに入浴の問題があった。今は介護保険を利用してデイサービスや訪問入浴といったこともできる。

しかし、母は娘や他人にお風呂の手伝いをしてもらうこと自体「恥ずかしいからいやだ。」と強く拒否した。

私と妹は「お風呂の手伝いなしで本当に大丈夫？」と聞くと、母が「シャワーだったらひとりで洗うことができるから。」と言う。

それで、母がシャワーを使って体を洗いやすくできるよう、浴室の洗い場に置くことができる背もたれとひじ掛けがついた浴室用の椅子を購入したのである。

また、一人暮らしを続けている母だが、万が一の事故も今後考えられる。私と妹は母を説得して、警備会社に連絡がすぐ行くように見守りサービスの機材を導入した。

娘たちに迷惑をかけたくないという母の気持ちを尊重するために、こうして自宅で生活できるように環境を整えたのである。

私たちの支援を受けながら一人暮らしを続けている母は、『病気はきつとよくなる』という思いが強くなったようだ。

私と妹は、こんなふうに思っている母に本当のことを言えなかった。

母の抗がん剤による治療は、退院後も続いていた。車の運転ができる妹が、母の通院の送迎をしてくれたのである。私も可能な限り同行するようにしていた。

治療が終わるとちやうど昼食時になるので、いつも3人で一緒に食事をした。

病院の食堂を利用することが多かったが、そこでの母のお気に入りメニューはレモンの輪切りが入ったラーメンである。しかし母は、お気に入りメニューでさえ全部食べることが出来なかった。薬の影響で食欲も落ちていたのである。

私は、「体力が落ちないように少しずつでもいいから食べてよ。」と母に言うことしかできなかった。

②④

私と妹は、抗がん剤の治療によって母の状態は安定しているうちに何とか故郷の長崎に連れて行けないものかと常々考えていた。

そのような思いを持ちながら過ごしていたある日、私と妹の仕事の休みがちやうど同じ日に重なったのである。

私は妹に「お母さんの体の調子が少しでも良いうちに長崎に行けるようにせえへん。早速やけど、今日、旅行会社に行って予約をしようよ。」と自分の思いを話した。

妹はちよつとびっくりした様子だったが、常々妹も私と一緒にの思いだったらしく、すぐに「行こう。」と同意してくれた。

旅行会社に着くと、窓口の順番をとる為に番号札をもらった。待合室でまっついていると、比較的早く順番が来たのである。

私と妹は担当の人がいるカウンターのところへ行き、3人分の大阪から長崎の往復の飛行機チケットとホテル2泊分の手配を希望していると伝えた。

同時に、一緒に行く予定の母の今の状態、足が病気の後遺症でむくみがあり動きづらくなっていること、歩くのも大変になっていることなどを担当の人に説明した。

このように、母の状態を伝えてもどこまで配慮してくれるかわからない。が、とにかく詳しく伝えたのである。

そしたら、担当の人は私たちの母の状態を聞いて、まず飛行機の座席を「お母さまが座りやすい位置に予約を入れましょう。」と提案してくれた。

また、併せて車いすを借りるために空港のどこへ行けばよいのかということも親切に教えてもらったのである。

他に長崎空港から市内へ向かう際、母が移動しやすいようにレンタカーの予約をお願いした。車の運転ができるのは妹だけだが、「何とか頑張って運転するわ。」と言ってくれた。宿泊するところは、グラバー園近くのホテルにした。

そこは、昔、私と母が長崎へ行った時に泊まったホテルだった。部屋の雰囲気もよく、従業員の方の対応がとてもよかった。良い思い出が残っているホテルだったので、もう一度泊まりたかったから予約をお願いしたのである。

旅行会社での予約の手続き、支払いが終わった後、母がいる家へ。

家に着くと、母に長崎へ行く手配を済ませたことを話した。

私の話を聞いた母はとても驚いた様子で、「どうしたの？ えらい急に決めたのね。孫たちとも一緒に行ける日にしたら良かったのに……。」と言う。

以前も長崎に行く時は、急に私が決めてしまうこともあったので、母は『またか』と内心思っていたのかもしれない。

ただ今回は母の状態を思い急遽決めたので、大好きな孫たちとの都合がつかず、一緒に行くことができなかったのは申し訳なかった。

②⑤

長崎行きが決まった後、母は定期受診のため通院している病院へ行き、前回と同じく診察の前に血液検査をおこなった。

血液検査の結果が出るまで少し時間がかかる。

母は待合室で待っている間、長崎に行けることがうれしいだろう。いつもより明るい表情で私たちと話していた。

やがて、血液検査の結果が出たため診察室へ。主治医の先生から、検査のデータがあまり思わしくないと告げられた。

私は、それを聞いて長崎行きをどうしようかと一瞬迷ったが、思い切って主治医の先生に「母の状態が少しでもよろうちに長崎へ行こうと思います。」と話した。

それを聞いた先生は、「ちょっとそれは……。」と母が長崎へ行くことを渋っている。

母の体調を考えると主治医の先生が賛成でないこともわかる。

が、私と妹はこの機会を逃したらもう長崎に行けないかもしれないこと、母の姉、伯母に会わせたい、そして母の両親のお墓まいりに行きたいという強い希望を主治医の先生に伝えた。

主治医の先生は、私たちの必死な強い思いをわかってくれたのだろうか……。

「もし、長崎の旅行の日程の途中で具合が悪くなるようだったら、即帰ってきてください。」と言いつつ何とか了解してくれた。

こうして、母と私たち姉妹は、無事長崎へ行けるようになったのである。

②⑥ 長崎へ出発する日が来るまで、母は自宅で今まで通りの生活をしていた。病気になる以前と違うのは、訪問看護師さんやリハビリの先生がくるようになったことである。

母は最初の頃「来てもらわんでも大丈夫よ。」と言ったが、私や妹が「体のためにきてもらったほうがいい。」とあんまりうるさく言うので、渋々受け入れたのだ。そのあと母は、訪問看護やリハビリが始まると休むことなく順調に利用していた。

リハビリの先生が来た当初、母の足はよく動いている。そんな様子を見て、先生は驚いていた。元々、母は杖がなくてもひとり歩いて買い物に行けるくらい足は丈夫だったが、病気の進行で足のむくみは徐々にひどくなっていた。そんな状況でも持ち前の我慢強さで、母は自分で工夫して転倒しないように家の中を歩いて生活していたのである。

また、足のむくみの影響は、今まで履いていたお気に入り靴を履けなくさせてしまった。いつもおしゃれな靴を履いて出かけていた母である。それができなくなることをとても残念がっていた。

しかし、現実には、長崎への旅行先で足に合わない靴をはいていると余計に疲れてしまうことが考えられる。それで私と妹は、母を連れて靴の販売店に行った。店は、母の家から妹の車に乗って5〜6分のところにある。

到着してから、店の中に入ってさがしていると母の足のサイズにちょうど合う靴が見つかった。マジックテープでとめるタイプで、足のむくみがあっても調整ができる。少し値段が高かったが、母と相談しその靴を購入することとなった。

そして、長崎へ行く当日となった。母は余程楽しみにしていたのか、朝、むかえに行く顔が自然とにこやかになっていた。

母は新しい靴を履き、私と妹が支えて車まで歩いて何とか乗車することができたのである。

②⑦ 妹の車で伊丹空港へむかい、1時間少し走ったところで空港の駐車場に到着。駐車場から空港のターミナルまで行こうとするが、母の足は前になかなか進まない。トランクを支えにしてやっと空港内に入ったところで、私は急いで車いすを借りにインフォメーションへ。そこで何とかやっと車いすを借りることができ、母をのせて空港のターミナルへ行くことができた。

ターミナルの中に入ると、伯母へのお土産を買いにいろんなお店をまわった。

おいしそうなお菓子の詰め合わせを見つけたので、母は「このお菓子買うわ。」と言って伯母のために購入したのである。

母は、そのお土産が気に入ったのだろう。とても満足そうにしていた。

お土産を買ったあと、長崎行きの飛行機に乘る為チェックインカウンターへ。

担当の人に、母は自力で歩行することが難しいことを話し、そこで飛行機に乘るための車いすを借りた。

代わりにインフォメーションで借りた車いすを返却し、その後、私たちは手荷物検査場へ。手荷物検査場を何とか無事に通過し、飛行機に搭乗するまでの時間に余裕があったので、待合室へ行った。

「ちよつとおなかすいたね。何か買おうか？」と母が言い出した。

治療中は食欲があまり出ないと言っていたので、私はうれしくなって「新しい食べ物のお店がいろいろとあるから見てみようか。」と提案すると母も妹も「賛成！」早速、お店がたくさんある場所に母の車いすを押してむかった。

様々なお店が並んでいるところに着き、そして、何を買うかいろいろと見て回った。

おいしそうなスイーツもあったが、母が「あつさりとして食べやすいものがいいわ。」と言うのでおにぎり専門店を見つけ、おいしそうなおにぎり3つと飲み物を買った。

ゆつくりと座って食べることができる場所をさがしていると、搭乗口近くにベンチを見つけた。母の車いすを寄せ、私と妹はベンチに座って、みんなで買ってきたおにぎりをほおばったのである。

久しぶり、母娘一緒に食べる食事はおいしかった。

いつもは食欲が落ちている母も余程おいしかったのか、きれいに残さず食べてしまった。

私たちがおにぎりを食べ終わるとちょうど飛行機への搭乗時間になったので、お手洗いをすませてから搭乗口へ。

搭乗口では事前に母のことを伝えていたため、一般の乗客の方が乗る前に母を搭乗させてもらった。空港職員の人に支えてもらいながら、ゆつくりと歩いて席についたのである。

母は、窓際の席に行くときぎづらくなるので、通路側に近い座席に座った。

窓際で外を見ることが好きな母は、少し残念そうにしていたが・・・・・・。

②⑧

私たちは、1時間ほどの空の散歩を楽しんだ。母は、窓からの景色が見えづらかったろうが・・・・・・。いつもと同じように真っ青な空の中、雲のじゅうたんの上を飛行機が飛んでいるようだった。

母は、「きれいね。」と自分の席から窓の外を見てにっこり笑う。

そんな私たちの様子を見ていたキャビンアテンダントの方が「写真撮りましょうか？」と言ってくれた。

私は思わず「ありがとうございます。お願いします。」と母と私たち姉妹が横一列に並んでいる写真を撮ってもらったのである。

そうこうしているうちに楽しい空の散歩が終わり、母の故郷長崎に着いた。

長崎空港でも、空港職員の方が母の手助けをしてくれた。仕事として対応してくれたのだろうが、その行為は私たちにとってはとてもありがたいことであった。

手荷物を受け取り、母が乗っている車いすを押してレンタカー店へ。事前に予約していたレンタカーを借りた後、空港の受付に車いすを返却してから長崎市内へ出発したのである。

前回もそうであつたが、今回の旅の最初に母のたつての希望である平和公園にむかった。平和公園近くにある祈念館には、母の両親の写真がおさめられている。

母は、両親への慰霊、そして原爆で亡くなった人々への慰霊もこめて長崎に帰省するたびに平和公園に行くことを強く望んでいた。

この時も、母は自分で作った千羽鶴を平和祈念像横の折鶴の塔におさめた。

ふと見ると、母は目頭をおさえていた。もしかしたら、母の心のどこかでこれが最後になるかと思っていたかもしれない。

千羽鶴を折鶴の塔におさめたあと、観光に来ていた人が「写真を撮りましょうか。」と言ってくれた。ご厚意に甘えて写真を撮っていただいた。その写真は、母をはじめ私と妹もとても良い表情をしていたのである。

②⑨

平和公園を後にし、その日は遅くなったので、私たちは食事をするため店を捜した。

今までなら一般の店に入って食事するのが常であつた。

しかし、今回は母の足が動きづらく車いすを貸してもらえるところでないと店の中に入ることも難しい状態である。

私は妹に「大型のショッピングセンターの中にあるレストランに行こう。」と提案。

なぜなら、ショッピングセンター内のインフォメーションで車いすを借りることができるだろうと考えたからである。

母にもそのことを言うと賛同してくれたので、妹が運転する車で大型のショッピングセンターへむかった。

大型のショッピングセンターに着くと、まずは車いすを借りるためにインフォメーションへ。無料で貸し出してくれる車いすは、店の出入口に設置しているとインフォメーションのお姉さんが教えてくれた。

実は今まで、私は車いすを店先で借りる機会がなかったから、母が病気で歩きづらくなつて初めてといつていくらいこのことを知ったのである。

本当なら、車いすを自ら持参して旅行するのが理想であろう。しかし、今回の長崎行きは急に決まったため、車いすを用意することができなかった。

だから、無料で貸し出してくれる車いすがあることで、旅行先の長崎でも母が楽に移動できるから本当によかった。

母と妹と一緒にショッピングセンターの中を巡ると、長崎の名物料理を取り扱っている中華店を見つけた。3人とも一目見て「ここにしよう。」と意見が一致したので、その中華店に入ったのである。

店の中に入ると、店員さんが車いすの母を見て「こちらへどうぞ。」と車いすが入りやすい席についてからメニューを見せてもらい、母と妹は長崎ちゃんぽん、私はいつもと同じく長崎皿うどんを注文した。私は、昔から長崎皿うどんのパリパリとした揚げ麺が大好きである。

それ以外にトウロンポーという白いパンに豚の角煮がはさんでいる料理を3人分注文した。トウロンポーは、昔、家族で長崎の中華街で食事をした時に初めて食べたが、そのおいしさが忘れられず長崎に来たらいつも頼んで食べていた。中に入っている豚肉の角煮がほどよいやわらかさで、甘辛だが薄味に慣れている私にもほどよい味付けである。青菜とからしを入れて食べるのでそれがアクセントになってとてもおいしい。

そうこうしているうちに、注文した料理が来た。

母は「おいしそうだね。久しぶりだね。」とうれしそうに料理をながめた。

そして、母は私たちと一緒に食べているせいか、いつもよりも注文した料理をたくさんおいしそうに食べてしまったのである。

それを見て妹が「よう食べたね。ここにきてよかったわ。」とにっこり笑った。

食事のあと、私たちは再びショッピングセンターの中を見てまわった。

3人ともいろんな店を巡るのがもともと好きである。洋服や雑貨、食料品など見ているうちに、気が付いたら随分時間がたってしまった。

母も疲れた様子だったので、ショッピングセンターを出て予約していたホテルへむかった。

ショッピングセンターからホテルまではそんなに時間がかからなかった。到着してからホテルの駐車場に車を入れようとしたが、そこからホテルの出入口までかなり離れている。そうなるとう母はかなり移動しづらいだろうと思い、ホテルのフロントに行って事情を話し、車いすの方が乗り降りしやすいスペースに駐車させてもらった。

駐車後、母のためにホテルの人にお願ひして無料貸し出しができる車いすを借りた。

母をその車いすに乗せ、後ろから押してホテルのフロントへ行き、チェックイン。キーをもらい、部屋の中に入ると母は疲れたのか、すぐにベッドに横たわった。

私が、「お母さん、疲れた？ 足マッサージしてあげるわ。」と母の足のむくみが少しでも和らぐようにマッサージをした。

素人の私がするので、あまり効かなかったかもしれないが、母は気持ちよさそうな顔をしながら横になり、いつの間にか眠ってしまったのである。

③⑩

翌日は、とてもいい天気だった。私たちは朝早く起きて、妹が運転する車で母の姉であ

る伯母の家へ。

1時間ほど車で移動すると、伯母が事前に教えてくれた駐車場に着いた。電話で到着したと伯母に連絡すると、母のことを心配して駐車場近くまで出迎えてくれたのである。

この時は車いすがなかったので、母は車から降りて伯母の自宅玄関まで私と妹に支えられながらなんとか歩くことができた。

伯母は、私たちをたくさんのごちそうで歓迎してくれた。

美味しいごちそうを食べながら、母は久しぶりに会った伯母の横に座りうれしそうに話していた。楽しい雰囲気の中で、母の食欲もいつもより増しているようである。そんな幸せなひとときはあつという間に過ぎていく。

帰り際、母は「おじいちゃんとおばあちゃんにお別れのあいさつをするわ。」と言って祀られている仏壇にひとりで行こうとした。私と妹は、あわてて母が転倒しないように支えて一緒にお別れの挨拶をしたのである。

ふと横を見ると、母は涙を流していた。もう二度と来ることができないと母自身感じとっていたのだろうか……。

③①

伯母の家を出ると、別れの時間を予感したかのように雨がしとしと降り出していた。雨のため足元はよくなかったが、母は私と妹に支えられながらゆつくりと車に乗り込んだのである。

34

車に乗ってから少したつと、母が「お墓の近くまで行きたい。」と言い出した。

それを聞いて、私と妹は顔を見合わせた。

お墓へのお参りは、狭い路地を通らなければならない。母の今の足の状態では、とうていお墓まで行くことが不可能である。私と妹は大丈夫だろうかと思いつつ、それでも母は行きたいと強く希望したため、お墓のそばまで妹が運転する車でむかった。

お墓へむかう道中、母はじつと外をながめている。そして、なじみの井戸が見えるとうれしそうに笑った。その井戸は、お墓参りに必要なお水をいただくために利用させてもらった手押しの井戸で母はよく『ぎつちよん』井戸と言っていた。

結局、直接お墓へ行くことは出来なかった。代わりに母は、両親が眠っているお墓の方向にむかって車の中から手をあわせていた。そして「もう行こうか。」と言った。その顔はとても満足そうだった。

③②

お墓のある場所から宿泊しているホテルまでの道中、夕方になったので食事ができる

ころを捜した。しかし、この日は歩くことが難しい母が行けるレストランがなかなか見つからない。

それで、私たちはスーパーマーケットでお弁当を買ってホテルで食べることにした。長崎で過ごす最後の日だったので、美味しい食事ができたらよかったのだが……。

ホテルに戻り、母と妹そして私はゆっくりとした雰囲気の中で、今回の旅行の思い出、父のこと、私たちが子供だった頃の思い出、孫たちのこと等いろんな話をしながら買ってきたお弁当をほおばった。

母は「このお弁当案外おいしかね。それと、久しぶり姉さんにも会えてよかったわ。」とうれしそうにしていた。

こうして長崎の最後の夜は過ぎていった。

それぞれの家に戻る日。

ホテルを出る時、外は曇り空で天候があまり良くなかった。雨がポツリポツリと降り出したかと思うと、急にどしゃぶりの雨となった。

天候が良ければ、もう少し長崎に滞在したかった。しかし、妹が「雨による渋滞で、空港まで行くのに時間がかかるかもしれないから早く行こう。」と言うので、予定の時間よりも早く私たちは空港にむかったのである。

長崎空港へむかう途中、母と私たち姉妹は3人ともおながすいてきた。お昼ごはん前だったが、何か食べようということになった。

そしたら、回転寿司の店を発見。寿司は、母をはじめ、私、妹も大好きである。全員一致で迷わず回転寿司の店に入るようになった。

この時は、車いすを借りることができなかったで、店の出入口近くに車を駐車した。どしゃぶりの雨の中、母を挟んで私と妹で体を支えながら店へ入った。

店員さんに案内してもらった席につくと、母は好きなお寿司を真っ先にとり、とてもおいしそうに食べていたのである。

病気で食欲がなかった母が、今回の旅行でよく食べ、笑い、大好きな姉である伯母とも話ができて本当によかった。

そして、私たちは無事、予定の時間通りに長崎空港に到着した。そこから飛行機に搭乗し、帰途だったのである。

③③

長崎から自宅へ戻った後も母の治療は続いていた。

久しぶりに故郷に帰ったことで母は前向きになっており、気丈にも一人暮らしを続けたのである。

自分のことは自分でしたいという気持ちが強かったのであろう。「ひとりで大丈夫だから。」
いつも言っていた。

私と妹に心配をかけたくないと思っていたにちがいない。

ある日、私は、母へいつものようにメールを送った。

しかし、母からの返信がない。時間をおいてから、電話を入れるがなかなか出てくれない。
私は用事で外に出かけていたが、思ったよりも早く片付いたので自宅に帰ろうとした矢先
のことだった。不安になった私は、母の家へ急いでむかったのである。

母の家に着くと、インターフォンを鳴らして呼びかけるも応答がない。私は、やむをえ
ず合鍵を使って家の中に入った。

そしたら、部屋の中で動けなくなった母を発見。思わず「お母さん！ 大丈夫ね！」

母は、ほっとしたのか私の顔を見て泣き出してしまふ。

このままにしておけないと思い、母を移動させるため後ろから抱きかかえ何とかベッドに
寝かせた。

ようやく落ち着いた母に事情を聞くと、固定電話に出ようとしたら足が動かなくなつて
転んでしまい立ち上がれなくなったと話してくれた。

周りにクッションがあつたため大きな怪我がなくよかったが………。

このことを妹にも連絡。私の話を聞いて驚き「今からそちに行くわ。」と言ってくれた。

程なくして妹が到着、そして、母が落ち着くまで私たちは一緒に過ごした。

食事をしたあと、私たちが帰る頃には「大丈夫だから。」と言って母はゆっくり歩いて玄

関先まで見送ってくれたのである。

③4

この一連の出来事があつた日を境に、母は「眠たい。眠たい。」といって横になっている
ことが多くなった。

訪問看護師さんから「徐々に血圧が下がってきています。お母様との別れの時期が近づい
てきているかもしれません。」と言われた。

終末期を迎える人が、寝ている時間が多くなるということは知識としてはあつた。

いざ、自分の母がこのような状態になっていくことは、私としてどこか受け入れ難いもの
である。心の準備もないままに別れの日が来るなんて考えられなかった。

その後、いつものように私は仕事先から母へメールを送った。しかし、母からメールの
返事がこない、電話にも出てくれないので心配になり母の家へむかった。

妹の子供たちも心配して駆けつけてくれた。母は、余程心細かったのだろう。私の顔を見
た途端泣き出した。

「大丈夫。ここにおるから安心して。」私が話しかけると母は少し落ち着いたようだった。

あとから来た妹と相談し、病院へ行った方がよいだろうということになった。そのことを母に伝えると「わかった……」。

それから、母は病院へ行く用意のため力を振り絞って2階に這いあがろうとしたので、私はあわてて転ばないように後ろから支えた。2階に上がると母は、洋服を取り出して何とか着替えることができた。しかし、着替えが終わって1階に降りようとするが、ひとりで降りることが到底できない。私と妹、妹の子供たちと協力し、母を支えて一段ずつ階段を座るようにしながらやっと降りることができたのである。

1階へ降りた後、母が「トイレに行きたい。」と言った。そしたら、妹の子供の一人が「おばあちゃんは、ぼくたちが小さい時いつも世話をしてくれたなあ。今度はぼくが助けるよ。」とまともに歩くことができなかった母を抱きかかえてトイレまで連れて行ってくれたのである。妹の子供たちがしてくれたことは、とてもありがたかった。

病院へは事前に母の状態を連絡し、救急車を要請することを伝えた。そのあと、救急へ連絡して救急車を要請。

到着した救急隊の人に、かかりつけの病院へ事前に連絡していることを告げ、そちらへ搬送をお願いした。家族の同乗も許されたので、私が救急車に同乗し妹たちとはあとから病院で合流することとなった。

程なくして救急車で母のかかりつけの病院に着くと、すぐ救急医に診てもらうことができた。

処方してもらった薬のおかげで、母は落ち着きを取り戻す。そのことを病院の看護師さんが知らせてくれたのである。

家族全員で母と会いたいところだったが、世界的に流行した感染症のため多人数で面会をすることは許されない。それで、私が代表して診察室に入った。

母は、私をみて「大丈夫かね。」としきりに言っていた。また病院に来たことが不安だったのだろう。私は、「絶対良くなって帰ることができるから。大丈夫だから。家に帰ろうね。」と励ました。そして、病室へ行くまで私はできるだけ母に話しかけた。本当は、私の方が母のそばを離れたくなかったのかもしれない。

その後、母はストレッチャーによって入院する病室へ運ばれていった。

③⑤

母が入院して4日後、面会の許可が出たため、私と妹は病院へむかった。

病院に到着してから母と会う前に、主治医の先生と今後のことを相談。

私はこの時点でも母の命の期限があることを信じたくなかった。しかし現実には、そのタイムリミットがせまっている。

私と妹は主治医の先生に「母と面会も自由にできない病院に入院させるより自宅に連れて帰りたいです。」そして「自宅に戻る際、往診ができる医師を紹介してください。お願いします。」と伝えた。

母が第一回目入院した時にも往診できる医師を紹介してほしいとお願いしたことがあった。が、当初は病院の医師と往診の医師がいると連絡のやりとりが難しくなるということ、病院の主治医の先生は難色を示していた。

けれども私たちの思いを察してくれたのか、往診できる医師を紹介してくれることに主治医の先生は了解してくれたのである。

主治医の先生との話が終わったあとで、母が入院している病室へむかった。

今回は、4人部屋に入院していた。私と妹は、母が入院した時にお金がかかってもいいから個室へ移動してほしいと病院にお願いしたが、個室が空いていなかったのでやむをえず4人部屋に入院することになったのである。

母の病室に入り、「調子はどう？」と言うと、少しぼんやりとした表情だったが、次第にすっかりとした口調で「あんたたち来てくれたん。ありがとう。」と答えてくれた。

病気の影響で母の顔がむくんだ状態だったが、私と妹にニツコリとほほえんだ。そんな母を見ると、早く連れて帰りたいかった。

こんな思いとは裏腹に面会の時間があつという間に過ぎ去っていく。

もつと母と一緒に話したかった。短い面会時間が終わり、私と妹は病室から退出しなければならなかった。

③⑥

母の面会から3日後、私と妹、そして妹の子供と一緒に母が家に帰ってくるための買い物をしていた。

妹の車に乗って次の場所に移動しようとしていた時、病院から妹の携帯電話に連絡が入る。

「お母さまの容態がよくありません。危篤状態です。急いで病院にお越しく下さい。」

母の担当である看護師さんからであった。

「えっ。そんな・・・」。私は頭の中が一瞬、真っ白になった。

『そんなはずはない。お母さんは大丈夫だ。』と、私はこの時でさえ母の状態を受け入れられなかった。

「お姉ちゃん大丈夫？ 病院に行くよ。」妹の言葉が現実へ引き戻したのである。

妹たちがいなくなったら、私一人であらうたえていただろう。

私たちは、急いで妹が運転する車で病院へむかったのだ。

③⑦

病院に到着し、母が入院している病棟へ。しかし、入院していた部屋には、母の姿がなかった。

母がいる場所がわからなかったので、私たちはナースステーションへ行き、看護師さんに

「母の状態が思わしくないと連絡があったので駆けつけました。病室に母親がいません。今どこにいますか？」と聞くと「観察室におられます。」

観察屋の中に入ると、母はモニターにつながれベッドの上で寝ていた。

父の時と違い雑然とした部屋の中で、最期の時を母がむかえなければならぬのは、正直残念だった。

世界的な感染症のため病室が空いていなかったかもしれないが、せめてそばにいる時間をもっとあればよかったのにと悔やんだ。

「お母さんしつかりしいや。みんなここにいるよ。」と、私、妹、孫たちは何度も何度も母に声をかけた。私たちの声に母は反応し、うなるような声を発した。話したくとも話せなかったのだろう。

このような状況であったが、せめて母に母の姉である伯母の声を聞かせたいという思いがあった。それで私は、伯母に電話をし、今、母が危篤状態であることを告げた。不謹慎かもしれないが、私は母の最期の別れの時を伯母に知らせたいという強い思いがあったので、そのようなことをしたのだ。

少しでも話してもらえるように電話のスピーカーを大きくし、母に伯母の声が届くようにしたのである。

それから、その場にいなかった妹の子供たちにも連絡。ひとりは何とか病院に到着した。ただし、もう一人の孫は遠方にいて間に合わないのので、携帯電話を使って呼びかけてもらった。

妹の夫、私の夫にもこのことを電話で連絡した。

私は、最後まで『大丈夫、よくなって……』という思いだった。妹も同じ思いだった。

しかし、みんなの願いもむなしく届かず、その日の晩遅く、母は永遠の眠りについた。

誕生日を迎える直前だった。

3カ月前まで、母は、自分のことは自分でしようとする気持ちをもって生活していた。デイサービスで友人ができ、人生を楽しんでいたのに。

こんなことになるとは思いもしなかった。

③⑧

母が亡くなった時に看取ってもらった先生がそつと教えてくれた。

母は、その先生と亡くなる直前までにこにこしながら話していたらしい。それを聞いて私は少しほっとした。病院の中で家族とはなかなか会えなかったが、先生が母と会ってよく話しかけてくれていたのうれしかったのだろう。

通夜・葬儀をおこなうため父を見送った時と同じ葬儀屋さんに連絡し、母を迎えに来てもらうこととなった。

迎えの車が到着するまでの間、私と妹たちは片時も母のそばから離れずにいたのである。私は、まだ母が亡くなったことを受け入れることができない状態で涙がとまらなかった。

そのような中、ようやく葬儀屋さんが病院に到着した。事前に看護師さんが母の衣服などを整えていたので葬儀屋さんが用意してくれた車にすぐ乗せてもらうことができたのである。

病院から葬儀会場まで車でむかう間、私は父の時と同じように母の横に座ってぼんやりと外を見ていた。やはり、母がいなくなったということが、信じられなかった。

葬儀会場に着くと、葬儀屋さんと葬儀の内容をどのようにするのかを話した。ちよつと私は頭がぼんやりとしていたため、話が半分しか把握できなかったかもしれない。

そばに妹や甥がいてくれたおかげで何とか葬儀の内容を調整することができた。

また、母の遺影は、妹家族と日帰り旅行した時に撮影した写真を使うことにした。とてもにこやかな表情である。その遺影を見ていると、まだ生きているのではないかと思われるくらいだった。

手続きが終わると、妹が母に化粧をしてくれた。手をさわると冷たかったが、きれいに化粧した表情を見ていると、眠っているだけでいつか起き出してくれるのではないかと思われた。

その日、私たちは葬儀会場の横で泊まり、母との最後の夜を過ごしたのである。

③⑨

翌日、母の葬儀は、父を見送った同じ会場でおこなった。父の命日と1週間ちがいだつた。

私と妹それぞれの家族だけのこじんまりとした葬儀で、妹の子供たちが母の好きだった曲を流してくれた。心あたたく母との最後の別れの日を皆で過ごすことができたのである。

私は、仕事帰りに母と電話でその日の出来事をお互いによく話していた。電話をかけるいつも明るい声で「おかえり！」と言ってくれた。

母の「おかえり！」の声を聞くとほっとする瞬間だった。

が、これからその声も聞くことができない。

④⑩

母が亡くなった後、父の時と同じように役所関係や家の登記の手続き、親類への挨拶状等を私と妹でしなければならぬ。

父が亡くなった時は、私が母の代わりに手続きをしなければという思いで気が張っていた。今は、父が亡くなった時の母の気持ちと同じである。ぼんやりとしていることが多くなっている。

そんな私を見て妹が「しつかりしいや。後のこと一緒にしていかなとあかんからなあ。」と
厳しい言葉の反面、私を励ましてくれているようであった。

④

父と母の終の棲家となった家の登記の手続きが妹の協力で完了した。これからは、私と
妹の名義の家となり二人でみていく。

先のことはまだ決めていないが、家族がふらつと来て安らげる場になればよいのと思っ
ている。

四十九日が過ぎてから母の遺骨は父が眠っているお寺にお願いすることになった。
生前の母の希望であったため、妹と相談し決めた。

これで父と母ふたり一緒のところにいることができる。

その後、伯母が原爆関係の祈念館で被爆手帳を持っていた人の遺影を保管していただい
くということを教えてくれた。

私は、母が歩んできた人生の証（あかし）となればと思い、妹とも相談して祈念館へ電話
をかけた。

係の人に聞いたところ、遺影の他にも家族との写真を保管して頂けるとのことである。

母の写真だけでなく、家族の写真と一緒に母も寂しくないだろうと思い、申込書を送っ
てもらい申請することにした。申込書の中には、原爆を受けたエピソードを記入する欄が
あったが、妹が母から聞いていたことをよく覚えていたため、私がそれを聞いて文章にま
とめたのだ。

そして、母の遺影、家族との写真、母が原爆を受けた時のエピソードを祈念館に送った
のである。

エピローグ

母が永遠の眠りについてから半年。長崎の祈念館から企画展のひとつとして、母の遺影
やエピソードを記した展示をしたいと打診の連絡があった。

私はすぐに「お願いします。」と返答。妹にもこの件を伝えると賛成してくれた。

企画展開催が迫ったある日、私はこのような機会はないと思い、妹に「企画展が行われ
る日程の間に一緒に長崎へ行こうか？」と誘った。

そしたら、妹も「そうねえ。いい機会だし行こう。」と賛同してくれたのである。

後日、私と妹だけでなく、妹の子供たちも「一緒に行きたい。」と強く希望したので一緒に
長崎へ行くこととなったのだ。

そういえば昔、母、妹、妹の子供たち、私と一緒に長崎へ行ったことがあった。

妹の子どもたちは、初めて長崎に来てとてもはしゃいでいた。母は、孫たちと一緒に故郷に来ることができてとてもうれしそうだった。

その頃からずいぶん時がたっていたが、つい最近のことのように思われる。

今度は、みんな一緒に長崎へ来ることができるよう、母がお膳立てしてくれているように私は思えたのである。

長崎に到着した日は、私たちみんなで祈念館に行き、母の遺影が展示されている企画展を見学した。

母の遺影はとてもこやかで、みんなを歓迎しているように思えた。

母は、幼い頃に原子爆弾の被害を受けるという大変な出来事に遭った。

しかし、被爆者という社会の偏見の目の中でそれにもめげず、まわりの人たちに支えられて生きてきたのである。

母は、私たちには長崎に原子爆弾が落とされた時のことを多く語らなかったが、父と出会う家族に恵まれ幸せな人生だったと思っている。

（四〇〇詰め原稿用紙換算一三六枚）